

令和元年6月18日現在

機関番号：32698

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04712

研究課題名(和文) 小学校国語科「書くこと」における物語創作の言語活動の展開に関する研究

研究課題名(英文) Study on language activity development in elementary school through story creation

研究代表者

秋保 恵子 (AKIHO, KEIKO)

東京純心大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：60712073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、2008年の『小学校学習指導要領』の「国語」において、戦後初めて示された「想像したこと」や「物語」などの創作的文章を書く「言語活動」(本研究においては、物語創作の言語活動と称す)に着目した。物語創作の言語活動に焦点が当てられるようになった思想的、歴史的背景を探ると共に、実際の小学校における授業を考案し、小学校教諭の協力の下、授業実践を行った。一定の場面展開の手順を示した上で「主人公」を自ら定め、ストーリーを展開する手法を通して、児童が自由に想像力や思考力を働かせている状況を確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、国語科の授業において行われる「想像したことを書く」「物語を創作する」言語活動すなわち物語創作の言語活動について、国語科教育史的に検討することにより、現代の同言語活動の実践の教育的価値を示すことができた。また、その授業実践を提案することによって今後の教育実践に一案を残すと共に、授業を受けた児童にとっても一定の国語科的成長を認めることができたと思う。

研究成果の概要(英文)：This study focused on "language activities" such as "writing what children imagined" or "story creation". I call them "language activity of story creation." Such an activity was first included in the Course of Study in 2008 after World War . I investigated ideological and historical backgrounds of "language activity of story creation" and then, designed a "language activity of story creation" class with the cooperation of elementary school teachers. After a teacher showed the procedure of a story creation to the children in the designated class, they decided on their main character and developed their own story. I was able to confirm that each child was free to use his or her imagination and thinking through this activity.

研究分野：教科教育学

キーワード：物語創作の言語活動 小学校教諭との協働 書くこと 綴方教育 大正新教育期 奥野庄太郎

1. 研究開始当初の背景

『小学校学習指導要領』(2008年)の「国語」では、「第2 各学年の目標及び内容」において、「書くこと」の領域内に、「想像したこと」や「物語」という創作的文章を書く「言語活動」が新たに示された。しかし、研究開始当時、この「想像したこと」や「物語」という創作的文章を書く言語活動(本研究では 物語創作の言語活動 と称す)の研究は未だ活発とは言えない状況であった。

物語創作の言語活動の研究が十分に展開されていない理由としては、以下の点が考えられた。第一に、戦後初めて「内容(指導事項・言語活動)」に盛り込まれたため、過去約70年間、国語科教育の中心的課題とはなっておらず、戦後国語科教育史の中に寄って立つべき研究実績が不足している。第二に、授業を行う小学校教諭自身の物語創作とその指導経験が乏しく、馴染みがない。第三に、授業の「ねらい/目標」や「指導事項」との関連から、「物語創作の言語活動」を用いる必然性が見出せない。第四に、物語を創作するという言語活動がもつ本質的な要素への追究が不足している。

これらの背景を念頭に以下の目的で本研究を進めることとした。

2. 研究の目的

(1)戦後初めて『小学校学習指導要領』(2008年)「国語」の内容に明記された新規分野である「想像したこと」や「物語」を「書く」という 物語創作の言語活動 が、授業場面で児童の「思考力想像力及び言語感覚」の育成に寄与する指導法の理論と実践を提示する。

(2)大正新教育期の小学校訓導等によって展開されていた国語科の実践や理論に見られる物語創作の指導の起源について、国語科教育史的・思想史的角度から検討を行うことによって、物語創作の指導が、現代において行われる背景及び、その意義と課題を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は3年間の計画であり、以下の3項目の研究課題を同時並行的に進行させた。

(1)現行の『小学校学習指導要領』に基づいて行われている「物語創作の言語活動」の実践やそれらを支える理論に関する先行研究を収集し、分析・考察する。

(2)大正新教育期の創作的・芸術的綴方の実践と理論に関する資料を収集し、分析・考察する。

(3)現職の小学校教諭の方々(研究協力者)の協働態勢を整え、物語創作の言語活動を伴う国語科の授業を計画・実施・省察する。児童の実態を充分考慮した上で、研究スタイルに関しては、研究協力者の方々が、主体的に関わることのできる研究になるよう、内容の充実と方法の柔軟性を心がける。

3年間の本研究計画を実現させる中で、研究課題(1)(3)は漸次(1)から(3)の比重が増すことになる。また、(2)に関しては3年間を通じて考察を深める。

4. 研究成果

(1) 研究課題(1)については、既に(秋保2016)で調査を始めており、極めて個人的だと考えられる 物語創作の言語活動 が、授業時に生じる様々な「往還」を要素にして営まれていることを示していた。一方、本研究進行中の2017年3月31日には『小学校学習指導要領』が改訂された。その中では、以前第3学年から第6学年の言語活動に位置づけられていた「物語」を書く活動が、第1学年から第4学年へと変化することが示された。この変化は、一見「物語」を書く活動の該当学年が下の学年に移行したように見られる中で、中学校の第2学年の「書くこと」の言語活動例には、「短歌や俳句、物語を創作するなど、感じたことや想像したことを書く活動」が位置づけられていることも確認でき、物語創作の言語活動 が依然として小中学校の教育内容として一定の存在価値を示していると考えられた。このことは、引き続き本研究の継続の意義を示すものと解釈できる。

このような状況下で、また、2016年度を中心に本研究のための文献を収集し参考にする中で、先に確認した「往還」の内、特に「書くこと」と「読むこと」との往還、「自分(児童)と他者(友だち・先生)」との往還、「個の「学び」と集団の「学び」との往還についての観点と、「自分の分身あるいは駒としての登場人物という考え方」、「自由(楽しさ)の享受(秋保2016)」という観点は、今後その是非を問う必要があると着目し始めた。そのため、研究の方法(3)に該当する実践研究の際に、これらの観点を導入する方向性が定まった。

(2) 研究課題(2)については、2016年5月に全国大学国語教育学会大会において「物語創作の

言語活動に関する一考察：大正期奥野庄太郎の綴方教育における物語創作指導に注目して」と題して自由研究発表を行うと共に、「奥野庄太郎の綴方教育における物語創作指導」(秋保 2017)においてその成果を発表した。その中では、大正新教育期に行われた物語創作の綴方指導の一例として、開校期の私立成城小学校の訓導であった奥野庄太郎の綴方教育における物語創作指導の有り様を明らかにした。先行研究において『赤い鳥』や「生活綴方」との関連で語られることの多い奥野の綴方教育観が、当時の「ありのまゝ」を追う流れと異なっていたことを示した。また、奥野の物語創作指導においては、着想・発想指導を重視しており、「世の中に既に存在している事象に対して「意味を見出す」ことで「心の喜びに浸ることのできる幸福者」になれ、それが「綴り方を愛するもの」となることで実現できるという考え方」が示され、「書き手がゼロから綴るという「生み出す心」への尊重が記されている」(秋保 2017)と考えられた。この観点は、物語創作の言語活動の本質的な性格を示している。この歴史的思想的研究は、研究課題(3)において授業をデザインする際の重要な示唆となった。

(3)-a 研究課題(3)は、本研究の2年目に当たる2017年度に、東京都内の公立小学校において、主任教諭の方の協力を得て実施することができた。第1学年の第3学期に全8時間扱いで、物語創作の言語活動を取り入れた授業研究並びに研究授業を実施した。研究協力者と研究代表者とで二人三脚の授業実践を実施した。本授業研究には、2方向の意義を視野に入れつつ研究を進行させた。まず、本研究の直接的な目的である「物語創作の言語活動の研究であることは言うまでもなく、その成果については後述する。」(3)-b)

その上で、本研究では、現職の小学校教諭の方々と大学教員との一つの研究スタイルの提示にもチャレンジしたいと考えていた。具体的には、研究代表者の提案する指導計画や指導案をたたき台として、授業者である小学校教諭の方との「協働」で行う授業研究であるという意味合いを重視していた。本授業研究においては、研究代表者がT2として個々の児童の支援に入ることはあったが、基本的には授業を受ける児童をよく理解している担任が授業者となることを前提として臨んだ。更に、授業者にも積極的に指導計画や授業の内容や方法についての意見を述べていただきたいと考えていた。そのため、合計8回、7日間(第4回と第5回は同日)の研究授業日の他、研究授業日と同日も含め、9回の事前事後の研究会の機会を設けた。この中には、研究協力者の在籍校の校長にも同席していただき、研究代表者の所属大学の研究倫理審査に提出した方法による研究計画の説明を行った回もある。本研究に協力していただくために13日間を要した。

ご協力いただいた大西亜里紗主任教諭とは、「面白い授業を(for children)、面白く授業を創る(for us)」を合い言葉に協働研究を行った。一方、授業の成果は当該小学校の児童に還元できるものであったと考えることができるとしても、公立小学校において日常の小学校教諭としての仕事をされながら協力いただくことをどこまでを是とすることができるのかは、今後も検証を重ねていかなければならない課題であると考えている。

(3)-b

物語創作の言語活動の単元の提案

以下のような単元を構成して授業実践を行った。

7単元名：「『そうぞう力』をつかって、ものがたりをつくらう：「かくこと」っておもしろいな」
1単元の目標（学習のめあて）

- ・想像力の醸成：自由に想像することでお話をつくる楽しさを味わわせる。
「『そうぞう力』をじゆうにつかってものがたりをつくることができるようになる。
- ・語彙の拡大：言葉を選ぶとお話づくりが楽しくなることを知らせる。
たくさんあることばのなかからことばをえらんで、ものがたりをつくることのできるようになる。
- ・論理的思考力の育成：根拠をもって文章を組み立てる面白さや達成感を味わわせる。
「わけ」をかんがえてものがたりをつくることのできるようになる。

2)指導の工夫（具体的な教師の手立て）

- ・指導者の考え方の基本：結果としての「作品」よりも、思考の「過程」を重視する前提に立ち、毎時間の指導の手立てを大切にする。
児童自身に以下の3条件を理解させながら授業を行う。
 - ・場面設定における「主人公」の性格が変容していく物語にする。手立てとしては、主人公の性格が、「行動」へどのように反映されているのかを考えさせる。
 - ・「ものがたりのすすめかた4だんかい」のルールに則る。

4段階

はじめ：状況設定・発端/主人公の登場＝時・所・主人公の性格
であい：事件展開/主人公以外の登場人物との出会い
できごと：山場
おわり/つづく：終結/開かれた終結でも良い。

研究授業結果の評価

実際行った研究授業の記録については、様々な実践的な先行研究の方法を参考にしつつ、研究

代表者の筆記による記録と2台設置したVTR映像の分析が中心になるだろうと考えていた。しかし、結果的には児童の映像を全て撮ることにに関して、個別の児童に対する配慮を要したため、VTRを1台とし、完全な映像として記録することができなかった。また、物語創作の言語活動という授業内容の性格から、児童が個々に活動している時間も多く、それら個々の児童の様子やつぶやきを全て記録することも不可能であった。授業者とTA(研究代表者)二人で研究授業を記録する場合の方法は、内容の分析方法も含めて今後研究を深めるべき点である。

一方、授業者との議論を重ねることができたため、授業者の担任としての判断が、本研究の評価を行う上で重要な資料となったと考える。本研究授業外の時間でも、児童が「今日はお話(物語)づくりはやらないのですか」と尋ねたり、児童の様子から「どんどん続きを書きたい」という思いや、「書きたいからもっとこの学習をしたい」「書けなくても、考えるのが楽しい」というような反応があったりしたという評価があった。

(3)に関わる本研究の詳しい分析は、(1)(2)の成果とも関連付けながら、今後論文等として発表する予定である。

5. 主な発表論文等 (研究代表者は下線)

[雑誌論文](計1件)

秋保恵子、奥野庄太郎の綴方教育における物語創作指導、東京純心大学紀要・現代文化学部、第21号、2017、13-29

[学会発表](計1件)

秋保恵子、物語創作の言語活動に関する一考察：大正期奥野庄太郎の綴方教育における物語創作指導に注目して、第130回全国大学国語教育学会新潟大会 自由研究発表(於新潟大学五十嵐キャンパス) 2016.5.29

6. 研究組織

[研究代表者]

秋保 恵子

AKIHO, Keiko

東京純心大学・現代文化学部・こども文化学科・准教授

研究者番号：60712073

[その他の研究協力者：小学校における授業実践の授業者]

大西 亜里紗

ONISHI, Arisa

世田谷区立桜小学校・主任教諭(2017年度 第1学年担任)